

『易緯』の総合的研究

(要旨)

広島大学大学院文学研究科
博士課程後期人文学専攻
学生番号：D145931
氏名：藤田 衛

本論文は、緯書、特に『易緯』を研究対象とし、『易緯』の思想面、文献面から検討した、『易緯』の総合的研究である。日本の緯書研究の礎を築いたのは、安居香山・中村璋八の両氏である。両氏は、中国書・日本書から網羅的に緯書の佚文を収集され、『重修緯書集成』を編纂された。このことにより、緯書の内容のより正確な把握が可能となり、緯書研究は格段に進歩することとなった。それでもいまだ残された課題は多い。まず、安居香山氏の緯書の定義が一般的に受け入れられているものの、研究者によって若干の認識の違いが存在する。また、緯書がいつ頃成立したかも、非常に重要な問題である。これまで緯書の成立時期については、様々な説が提出されてきた。現在、前漢末に成立したとするのが通説となっている。緯書の成立時期の見解の相違は、緯書をどう認識しているかによる部分が多い。それゆえ、新たに緯書を定義した上で、改めて緯書の成立時期を検討することが先決となる。

本論は、緯書のとりわけ『易緯』に着目して研究したものである。『易緯』とは、緯書中における『易経』の解釈書である。これまでの緯書思想研究は、『易緯』を中心に行われてきた。それは、『易緯』のみ纏まった形で伝存してきたことによる。『易緯』の研究が他篇に較べて進展しているとはいえ、研究し尽くされたわけではない。いまだ解明されていない部分の方が多い。『易緯』は伝存しているとはいえ、その中には偽書や後世の付け加えが存在する。文献研究では、一次資料をどのように扱うかが極めて重要となる。『易緯』で言えば、「易緯八種」が一次資料に当たる。「易緯八種」の性質の精確な把握、それが本研究の目的の一つである。

これまでの『易緯』研究は、京房との関わりを中心に論じられてきた。だが『易緯』は京氏易の影響が色濃いことは否定しえない事実であっても、本当に注目すべきはその差異である。『易緯』には京氏易と差別化されるような独創的な面があったはずである。そこに『易緯』の意義が現れていると考える。『易緯』の易術における京房の易学の継承と、その独創性を明らかにすることが、本研究の目的が目指す地点である。

第一篇第一章・第二章では、緯書が完全な形で存在していた時期では緯書はどのように捉えられていたか、という観点から、緯書の定義付けを行い、その緯書の定義に基づき、緯書の成立時期について検討した。その結果、緯書とは、孔子の作とされ、『河図』九篇・『洛書』六篇、『河図』『洛書』を演繹した書三十篇、七経緯（『易緯』『尚書緯』『詩緯』『礼緯』『楽緯』『春秋緯』『孝経緯』）三十六篇、合計八十一篇で構成された讖（効験のある書）のことであると定義した。ただ、それら緯書に含まれる書物は、すべてが同時に成立したわけではなく、段階的に成立した。まず『河図』『洛書』が成立し、次に『河図』『洛書』を演繹した書、最後に七経緯が成立したと考えられた。『河図』『洛書』は、前漢末に成立し、平帝元始五年に『尚書中候』とともに取り上げられた。『河図』『洛書』を演繹した書も、その頃に成立したものとした。一方、七経緯は、それより遅れて新王朝初期頃に王莽に敵対する者たち、とりわけ今文学派によって制作された。そして緯書の成立時期としては、緯書の構成要素が揃った時、すなわち七経緯が成立した新王朝初期頃とした。

第二篇では、『易緯』八種の真偽を中心に文献面から検討を行った。

第一章では、通行本『易緯』八種がどのように伝承されてきたのか検討した。通行本『易緯』八種は、基本的には『永楽大典』本に基づく。そして、その『永楽大典』本の来源は、南宋の『易緯』、とりわけ「易緯七卷」本の系統に求められた。緯書の中で、『易緯』のみ伝存した一因には、『易』に通ずる好事家にとっては、『易緯』は魅力的な書物であり、所有する価値があったとし、他の緯書は、『易緯』に比べ、所有する者が少なく、所有者の多寡によって、『易緯』は伝存され、他の緯書は散逸してしまったとした。

第二章では、『乾鑿度』巻上下に付された鄭玄注の真偽について検討した。その結果、巻上は、鄭玄注だけでなく別人の注も含まれていることが明らかとなった。また、正文の注文への竄入も疑われる箇所も存在した。一方、巻下は、『乾鑿度』鄭玄注の佚文と一致する例が多く、その注の内容は鄭玄の『易』解釈の特徴を具備していた。このことから、巻下注は、基本的に鄭玄注だと考えられた。

第三章では、通行本『易緯』八種の真偽について検討した。その結果、『易緯』八種には偽書や後世の竄入が含まれていることが明らかとなった。ただ、全くの偽書は『乾坤鑿度』だけである。『稽覽図』巻下は、もとは『易緯』ではないがその内容は『易緯』と関係がある書物だと考えられた。その他の『易緯』は、大体は成立当初からの『易緯』の文を伝えていると考えられた。そして注文に関しては、『乾坤鑿度』『稽覽図』巻下注を除いて、おおむね鄭玄注だと認められた。

第三篇では、『易緯』に見える易術を中心に検討した。

第一章は、『乾鑿度』巻下及び『稽覽図』巻下に見える爻辰説に関する記述の検討を通して、『易緯』の爻辰説の構造そして京氏易との関わりについて考察した。その結果、通行本『易緯』には、二種類の爻辰説が存在したことが明らかとなった。『乾鑿度』巻下と『稽覽図』巻下の爻辰説である。しかし本来、『易緯』には二種類の爻辰説があったわけではなかった。『稽覽図』巻下は、もともとは『稽覽図』ではなく、後世に作られた『易緯』に関連した書物であったと考えられた。『乾鑿度』の爻辰説は、京房の納支の発展形であったことを明らかにした。

第二章では、『易緯』に見える三種類の世軌説、世軌説、堯世軌・文王世軌・六十四卦世軌について検討した。その結果、堯世軌は一軌七百六十、文王世軌は一軌七百二十とされ、六十四卦世軌は各六十四卦に卦の陽爻・陰爻の数に応じて軌数を割り当てる説であることを明らかにした。そして、堯世軌・文王世軌は、一王朝の長さを表し、一種の王朝交替論であった。それが堯世軌と文王世軌とに分かれているのは、堯世軌は暦面での王朝交替の周期で、文王世軌は『易』に基づく王朝交替の周期といった性質の相違があったものと考えられた。一方、六十四卦世軌には、一王朝の長さという特徴があったかは明確ではなく、専ら易術に使われる一つの道具であった。

第三章では、「推厄所遭法」の構造を、桃源瑞仙『周易命期略秘伝』を参考にして、解析した。「推厄所遭法」は、軌数を用いて十干を算出し、その十干に対応した災祥によって占候する易術であった。そして、『周易命期略秘伝』においてこの易術の日本での運用例が記

載されていることから、日本で実際に使用されていたことが明らかとなった。

第四章では、『稽覽図』巻下及び『周易命期略秘伝』に見える「推帝王即位法」の構造を解析した。「推帝王即位法」は、帝王の初期・中期・終期そして最大即位期間を設定し、初期から中期、中期から終期に移行できるのは、善政を行ったことによるとし、君主に善政を促すものであった。

第五章では、『乾鑿度』に見える「推即位之法」の構造を解析した。『乾鑿度』に見える「推即位之術」は、消息卦と六子で構成される「易姓四十二」に、聖人・庸人・君子・小人を割り当て、帝王がどの卦に当たるかを見て、その帝王の賢愚を占候するものであった。さらに、『乾鑿度』には王朝の世数を占候する易術も見え、消息卦それぞれに子孫に受け継がれる世数を設定し、王朝がどれだけ持続するかを占候するものであった。

第六章では、『稽覽図』の卦気説について検討した。その結果、『稽覽図』の卦気説は、京房の六日七分法を採用し、寒温風雨などあらゆる自然現象、二十四節気・七十二候を各卦にそれに見合った役割を与え、自然現象が通常の運行と違えば、現状の政治に対する応、災異の予兆だとみなし、このことによって君主に政治の改善、将来への対処を求めるものであった。そして、『漢書』京房伝に見える京房の卦気説と比較を通して、『稽覽図』の卦気説と基本的構造が一致することが明らかとなった。『稽覽図』の卦気説は、京氏易に基づくものであった。

第七章では、『通卦驗』に見える八卦卦気説について検討した。その結果、『通卦驗』の八卦卦気説は、各八卦に方位・八節・時刻・雲気を設定し、正常な雲気が正常な時期を外れて発生すれば、それに対応した災異が起こるとするものであったことが明らかとなった。そして、八卦卦気説の来源は、京房に求められた。

本論文によって、緯書の定義と成立時期について新たな見解を提示したとともに、『易緯』八種の資料的性質、『易緯』に見える易術の構造を明らかにした。特に『易緯』の思想的研究において、これまで不明瞭であった易術の構造を明らかにした。今回の研究によって、より一層、京氏易との関連性を浮き彫りにできた。『易緯』は、京房の後学の手になったことがより一層、明らかとなった。ただ、京房の易学とは全く同じではなかったと。『易緯』は、京房の易学を基礎としつつも、独自展開した易学が反映されていた。そしてそれが、緯書に取り込まれることによって、一介の学説だったものが、孔子の正統な学説へと昇華した。実態は京氏易である孔子の作とされる『易緯』と京房の京氏易、後漢において『易緯』が京氏易と差別化できた理由がここにあったのである。京房の死後、数十年に及ぶ、京房の後学による考究の蓄積の上に『易緯』の易術が成り立っていた。新王朝初期において京氏易に基づく最先端の易学が詰め込まれたのが、この『易緯』であった。